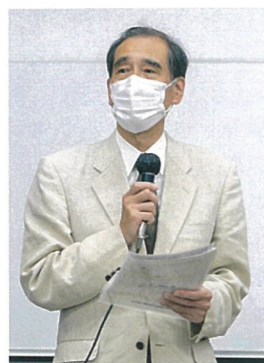


前川國男による学習院大学の校舎群は、1960年の本部棟や中央教室棟などの中心的施設に始まり、1963年の大学図書館、1983年の南5号館に至るまで、3期にわたり建設された(加えて1985年に男子高等科部室が竣工)。2020年は、最初の建物群が築後60年という人間に喩えれば還暦の、節目の年に当たる。この機会に前川建築の価値を再確認し、今後の保存活用のあり方を考えるための講演会を企画した。あいにくのコロナ禍により、会は1年の延期を余儀なくされたが、Zoomによる配信中心に実施形態を組み替え、2021年9月18日土曜日14時から2時間あまり、関係者のみの会場参加に、約100名のオンライン視聴者を加えて開催された。現地での対面式とZoomによる参加とを組み合わせた形式は、大学の授業において用いられているとはいえ、一般にも開かれた講演会ならではの技術的困難も予想されたが、幸い大きなトラブルもなく行われた。主催は文学部フランス語圏文化学科によるものではあるが、共催者として多大なご助力をいただいた本学文学部、図書館、史料館、アーカイブズのみならずには改めて深く感謝申し上げる。



学習院大学学長あいさつ

会においては、冒頭の趣旨説明、荒川一郎学長と水野謙史料館長による挨拶に続き、前川建築設計事務所の橋本功所長が、「日本の近代建築史の流れと目白キャンパスの前川建築」というタイトルで講演をなさった。その中では、まず西洋と日本の近代建築の流れを俯瞰的に辿ったのち、前川建築の展開を、軽量化の時代・ブルータリズムの時代・打ち込みタイトルの時代と3区分した上で、技術革新の要請がデザインと密接に連動していること(テクニカルアプローチ)が説明された。さらに、前川の敷地計画において重要な「広場」の概念が、学習院大学においても中核的な役割を担っており、またそれは戦前からの学習院の校舎配置を引き継いでいるのではないかと、という指摘がなされた。

続く松隈洋京都工芸繊維大学教授の「前川國男と学習院大学-前川國男の求めたもの」と題された講演は、会場外からのリモート形式で行われた。そこではまず前川がル・コルビュジエやアントニン・レーモンドから学んだものについて検討したのち、「都市のコア」という概念を中心とした、群造形の構成による前川の学習院大学キャンパスプランについて解説がなされた。さらに前川が学習院大学の校舎とともに写っている



講演会場にて

る貴重な写真を披露していただいた。

講演の後の質疑応答の時間では、坂倉準三による知られざるキャンパスプランと前川案との比較や、前川と坂倉との個人的関係、前川建築の魅力などについての質問があり、裏話も交えた興味深い応答がなされた。

この講演会を通じて痛感したのは、まず学習院大学に残された前川建築の貴重さと、それぞれに示された作風の多様さである。3期にわたって建てられた校舎群のうち、1960年当初のもので現在も残されているのは北1号館と南2号館のみだが、いずれも立面やユニテ・ダビタシオンを想起させる塔屋の造形が、ル・コルビュジエの強い影響を窺わせる。63年竣工の図書館は、プレキャストコンクリートやプレストレストコンクリートを多用した技術的な工夫により、広々とした内部空間を実現している。さらに83年の南5号館を特徴づける勾配屋根は、国会図書館新館など前川晩年の作品に見られる要素だが、これはモダニズムの定式であるフラットルーフに対して、より日本の気候に順応するべく導き出された方策と言えるだろう。

さらに強く感じたのは、前川が当該計画に託した精神的理想である。「現代の文明における人間の回復という重大な20世紀後半の課題を背負われる青年薫陶の場として、先づ学園に於ける人間の復興が先決であると考え⁽¹⁾」た前川にとって、彼が生前携わった唯一の本格的な学園計画であるこの事業こそが「建築の高貴さ」を具現化する舞台であり、近代合理主義の理想や精神性を担うべき場であったのではないだろうか。「安い絹より丈夫な木綿を着ようという質実剛健な精神⁽²⁾」に則り、コンクリート打放しを駆使した校舎群はローコストながらも、「生き生きとした人の流れ」を生み出すべく巧妙に配置され、その中心をなす「学問のコア」の中庭に与えられた「修道院のような」という形容が、この計画に託された思いを如実に示している。

前川がル・コルビュジエのもとで学んだ近代合理主義に基づくモダニズムの美学と、日本の実情との間の対立、葛藤は、彼の生涯の歩みを方向づける大きな要因であった。前川自身、近代合理主義の理念に限界を感じ、疑念を抱く機会がしばしばあり、そうした際には、ヨーロッパ精神の危機を論じたポール・ヴァレリーの言説を幾度も引用している。西洋近代と向き合い、日本の風土といかにして溶け合わせていくか、という問題は、単に建築にとどまらず、戦前戦後の日本の歩みにとって普遍的な意味を持っている。学習院という、ある意味「伝統」をどこよりも意識せざるをえない場に作られた前川のモダニズム建築を、後世どのように評価していくべきか、という問いは、そうした問題とも繋がっているように思われる。

(1) 学習院大学工事概要「設計者のことば」
(2) 河原一郎「建築計画について」『新建築』1960年3月号



橋本功氏(右)とともに

目白に集約させる構想だったと考えられる。

1945年4月13日の空襲で、目白キャンパスは本館・教室棟・寄宿舎ほか主要な木造校舎を焼失した。1947年に撮影された航空写真[図2]では、現北グラウンドや野球場付近にかつての校舎の焼け跡が生々しく残されている。学習院は残された校舎を使いながら同年に宮内省の管轄を離れて私立学校として再出発し、1949年には学習院大学が開学し校舎も徐々に整備されつつあった。しかし、1951年に坂倉が「学習院計画図」を描いた頃は、同年発表された「学習院院歌」(安倍能成作詞)のように、「破れさびし 廃墟の上に たちあがれ 新学習院」という詞は現実の世界であった。

坂倉による計画図がその後どのように扱われたか定かではない。わずかに1951年9月26日の学習院理事会において、「学習院の将来計画の図面(富永教授案)について常務理事から種々説明を行った」と



図2 目白学習院付近航空写真 1947年

との記録が残されており、このときの図面が「学習院計画図」であったと考えられる。富永惣一(1902~1980)は、学習院高等科卒業後、東京帝国大学文学部美学美術史学科に入学して坂倉準三とは同級生として親交をもち、1927年より学習院に着任した。戦後は学習院の財団法人化とその運営に尽力し、学習院常務理事及び学習院大学教授をつとめ美術史研究において活躍した。1959年には学習院を退職し国立西洋美術館初代館長に就任している。

目白キャンパス計画の立案が坂倉から前川にどのようにバトンタッチされたかも定かではないが、1958年前半には大学校舎建築を総合計画とする方針が固まり、前川國男建築設計事務所へ下検分が依頼された。同年10月16日の理事会において、安倍能成院長は「今迄の計画はむしろゆきあたりばつたりの感があつたが今後は組織的に計画を立てることが必要であり、富永教授の友人の前川氏にお願い、暖房、通風、上水道下水道等整然とすることにしたい。この費用もつては他よりも多少高いように思われるが恒久的なことを思へばやむを得ない。この計画は本年中には出来上る見込みである」と述べている(『学習院大学五十年史 上巻』2000年)。

なお、『大きな声 建築家坂倉準三の生涯』(『大きな声』刊行会編 1975年)に収録されている「坂倉準三年表1901~69」には、1941年の作品として「学習院計画案」が記載されている。「学習院計画案」がどのようなものか筆者は全く手がかりをつかめておらず、この計画案が事実とすれば坂倉と学習院との関係は戦前からのものだということになる。学習院を通して、坂倉と前川そして富永惣一との交流がどのようなものであったかも、資料からは明らかにされていない。課題は多く残されたままである。



図1 学習院計画図

2021年9月18日に開催された講演会「前川國男と学習院大学」において、学習院アーカイブズが所蔵する「学習院計画図」[図1](坂倉準三建築事務所作成、図面番号2865 1951年9月10日)が紹介された。前川國男がとりくんだ目白のキャンパスプラン以前に、前川の盟友である坂倉準三(1901~1969)が学習院に関係していたことを示す資料として関心を集めたため、この機会に現時点でわかり得たことと、数多い不明な部分を記しておく。

「学習院計画図」は、2011年に施設部施設課から学習院アーカイブズに移管された古い施設関連の文書や図面類の中から発見された。[図1]のように彩色された図面と、彩色されていない図面各1点で、折りたたまれて「目白配置図 昭和二十六年 坂倉準三氏案 小山」と表書きされた封筒に収納されていた。「小山」とは学習院常務理事等を歴任した小山直彦(1899~1976)のことで、小山の手元に長らく保管されていたと考えられる(小山直彦に関しては拙稿「財団設立関係資料」-私立学習院を支えた人たち「学習院アーカイブズ・ニューズレター」17号(2021年2月20日)参照)。

「学習院計画図」の特徴を簡単に挙げると、まず正門が図右下側目白駅寄りの、現西門(通用門)の位置に移されている。ちなみに西門が実際に設置されたのは1963年のことである。またキャンパス中央に大講堂を備えた本部が設置され、既存の本館(現西1号館)・理学部実験棟(現南1号館)ほかで構成される大学と、正門付近から短期大学、女子中・高等科、中等科、高等科の校舎群がそれぞれ円型の雨天体操場を備えて配置されている。[図1]の大きさではわかりづらいが、右側の池(血洗いの池)の左下に配置された校舎は「アートギャラリー」と名付けられている。1951年当時、中等科、短期大学、女子中・高等科は戸山キャンパスに設置されていた。戸山キャンパスはまだ学習院の所有ではなく国から借り入れる形の借地であったため、戸山にあった学校を移し、四谷にある初等科を除いて、

